

令和元年度 島田市立島田第二中学校



二中だより 2月号

☆校訓 **文化の薫る学校**

☆学校教育目標 「こころざしを持ち 自分の道を切り拓く生徒」

令和2年2月3日 発行

「いのちの歌」作詞 竹内まりや 作曲 村松崇継

「生きてゆくことの意味問いかけるそのたびに/胸をよぎる愛しい人々のあたたかさ/この星の片隅でめぐり会えた奇跡は/どんな宝石よりもたいせつな宝物/泣きたい日もある絶望に嘆く日も/(中略)/ささやかすぎる日々の中に かけがえない喜びがある/いつかは誰でもこの星にさよならを/する時が来るけれど命は継がれてゆく/生まれてきたこと 育ててもらえたこと/出会ったこと 笑ったこと/そのすべてにありがとう」

令和元年12月大晦日『NHK紅白歌合戦』特別企画コーナー「未来へ繋ぐ命のメッセージ」で、竹内まりやさんが心に響く歌声を聴かせてくれました。2020年1月1日に再リリースし、オリコンシングルランキング週間売上第1位。「64歳10か月」の1位獲得は、桑田佳祐さんの記録を上回り、シングル1位 歴代最年長記録になったそうです。



この曲、元々は、2008年放送、双子の三倉マナ・カナ主演 NHK連続テレビ小説『だんだん』の劇中ユニット「シジミジル」が演奏したそうです。訳あって離ればなれになった家族の辛苦のドラマ映像の背景に何回もこの曲が流されたそうです。また、2012年1月NHK BS「開拓者たち」で、旧満州で壮絶な帰還・避難生活を経験し、戦後の日本で新たな農地開拓に挑んだ人たちを描いたドキュメンタリードラマが放送されました。その主題歌にもこの曲が使われ、竹内さんは「家族や周りの人たちと共に、ささやかな日常を送れる幸福感、生かされていることへの感謝の気持ち、永遠につながっていく尊い命を、この曲で感じて聴いていただければ幸いです」とコメントしています。

その後、全国の小学校現場で「是非6年生に歌ってほしい歌」「命に感謝する気持ちがこみ上げてくる」「歌う子供たちも聴く人も心にぐっとくる言葉とメロディ」(月刊誌「教育音楽」2018)と言われ、結婚式、卒業式、1/2成人式などで歌われるようになったそうです。

作曲の村松崇継(1978年7月2日生)さんは静岡県浜松市出身です!プロデューサー、作曲家、ピアニスト、シンガーソングライター、浜松やらまいか大使。浜松日体高校卒、国立音楽大学作曲学科卒。2014年NHK全国学校音楽コンクール小学校課題曲「ゆうき」作曲。2014年スタジオジブリ作品の映画『思い出のマーニー』音楽担当。2014年日本レコード大賞企画賞、「いのちの歌」アルバムは日本レコード大賞最優秀アルバム賞受賞。2017年映画『64 ロクヨン』の音楽を担当し、日本アカデミー賞、優秀音楽賞を受賞。ロンドンの少年合唱団リベラにも楽曲を提供するなど、その活躍は世界に及んでいます。

さて、「いのちの歌」で、私が強烈に感じたフレーズがあります。歌詞「泣きたい日もある絶望に嘆く日も」のところで、コード進行は、「C→Bm7-5→E7→Am7」となります。Bm7-5はBdim7ほどではありませんが不安が迫り、一層和音を解決に向かわせます。しかし、その後も一連のフレーズは繰り返され、Cの解決になかなか辿り着きません。きっと歌詞の内容に合わせ、きっとこのコード進行が付けられたのでしょう。コード進行、そしてBm7-5の和音も、この曲の大きな特長・魅力であると思います。

ともあれ、アフガニスタンの中村哲さんをはじめ、世界では少なくない人々が志し途中で倒れてしまう報道があります。その中でも、命のバトンはずっと引き継がれていくことに心を熱くしながら希望を持ち続けたいと思います。

島田第二中学校校長 池谷 英人